

## ガラテヤ人への手紙1章6-10節 「一つの福音」

### 1A 変種した福音 6-7

#### 1B 牧会的懸念 6

#### 2B 付け足す福音 7

### 2A 神にのみ取り入れられる福音 8-10

#### 1B 使徒や天使も受ける断罪 8

#### 2B 教師への裁き 9

#### 3B キリストの僕 10

## 本文

ガラテヤ書 1 章を開いてください。私たちはガラテヤ書 1 章 6 節から見ます。パウロは、1-5 節で挨拶をしていますが、ガラテヤ人への手紙は他の教会宛の手紙とは様相が、その挨拶からしてかなり違うものとなっています。1 節で、「私が使徒となったのは、人間から出たことでなく、また人間の手を通したことでなく」と但し書きを入れていることです。そして 5 節で挨拶を終えています。他の手紙では、そこにいる聖徒たちのために祈り、神に感謝を捧げているという内容があります。ところがここにはありません。ここに、ガラテヤ書がとても深刻な問題を取り扱っていることを見ることができます。聖徒たちのことを祈る、神に感謝する、彼らのために神に願い求める、そういったことができなくさせられる、根本的なことを取り扱っています。福音が変質してしまった、ということです。

パウロは挨拶の中で、すでに福音を糧っていますが、キリストが私たちの罪のためにご自身を捨ててくださって、この悪い世界から私たちを救い出してくださるということ。そして、神がキリストを死者の中から甦らせてくださったということです。このことによって、私たちは救われます。それから逸脱した教えが、ガリヤ地方の諸教会に入り込んでいて、かなりの人が影響を受けていました。がん治療で言うなら、早期発見ではなくかなり癌が進行してしまっているような状態です。それで、その本質的な問題から、緊急性をもって早速パウロは取り組んでいきます。

### 1A 変種した福音 6-7

#### 1B 牧会的懸念 6

6 私は、キリストの恵みをもってあなたがたを召してくださったその方を、あなたがたがそんなにも急に見捨てて、ほかの福音に移って行くのに驚いています。

パウロは、ガラテヤの諸教会の信者たちのことについて、「驚いています。」と言っています。ここに、彼の深い戸惑いが現れています。牧会者としての深い懸念と言い換えるとよいでしょう。すぐ後に、これらの偽りの福音を伝える教師たちに対して、はっきりと断罪している宣言が出てきます

が、パウロはそのようなことを彼らには行なっていません。パウロは、彼らに対するキリストにある愛をもって語っており、主イエス・キリストの羊であることを知っているからです。その彼らをおぼろげに狼として対峙しています。しかし、パウロの彼らに対しては回復を切に願っているのです。それで困惑を、4章19-20節でこのように言い表しています。「私の子どもたちよ。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。それで、今あなたがたといっしょにすることができたら、そしてこんな語調でなく話せたらと思います。あなたがたのことをどうしたらよいかと困っているのです。」

そして、「あなたがたがそんなに急に見捨てて」という言葉にも、パウロの驚きと困惑がよく示されています。健全な教えに留まらせるのは、福音に仕える奉仕者には多くの労苦が伴います。きめ細やかな配慮、祈り、熱心、かつ忠実な御言葉の教えが必要です。そして、キリストにあって育て上げられた実があるのに、それを台無しにするのは、一回の害虫で十分なのです。忍耐をもって育てた草木が、一気に枯れ果ててしまうその驚きを、「そんなに急に見捨てて」と言い表しています。

イエス様が天の御国の喩えに、麦畑に毒麦の種を悪魔が蒔いたことが書かれていますね。イエス様はそれを抜き集めるのは後でしなさい、良い麦も摘んでしまうといけないから、と言われました。そうですね、最終的に異端の教えが裁かれるのは終わりの日であります。ですから、主がすべてを後に裁かれます。しかし、私たちが信じている福音がそのまま、キリストの福音のままなのかしっかりと見張っていないといけません。それを特に命じられているのは、牧者と言われている奉仕者であり、羊を養うだけでなく、狼が来るのを見張っているのです。

そして、「ほかの福音に移って行く」と言っています。移って行くのは、簡単です。イエス様が種まきの喩えで、岩地に落ちた種について語られました。喜んで御言葉を聞いても、試練や迫害があると捨ててしまいます。そして、茨の生えている土に種が落ちれば、それは世の思い煩いや富の誘惑によって実を結ばないと言っています。初め、喜んで福音を受け入れ信じたのに、パウロの後に来るユダヤ主義の教師らの教えを聞いて、それでそこから離れてしまっていたということがあります。

これは、とても残念なことですが、教会の中でずっと起こっていったことです。キリストに対する信仰に留まるのではなく、他に何かもっと良いものがある、他に救いがあるとして、キリストを信じていると口ではもしかしたら言うかもしれませんが、他にある良い知らせに動いていってしまう、ということです。そして、他に何か良い物があるということをキリスト教の中で是認していくのが、今日のユダヤ主義です。キリストから命じられたことがあるのに、それを行なわなくても救いを得ているのだと教えます。そして、キリストの福音ではない他の事柄に取り組ませることによって、自分は救われているのだという誤った保障や安心感を与えます。

そして、「キリストの恵みをもってあなたがたを召してくださったその方」と言っています。神は、私たちがキリストにあって、恵みをもって召していただきました。神がキリストにあって、救われるためのすべてのことを行なってくださいました。私たちは愛されるに値しないのに、神はご自身が愛であるがゆえに、愛し、それで罪を赦す、神の子どもにされる、神の国を受け継ぐという祝福を私たちに与えておられます。大事なのは、その愛の呼びかけに私たちが応えることです。それを「召し」あるいは「呼びかけ」と言います。数多くの日本の人は、このことがなかなか分からないでいます。信心深さというように、自分のほうで何かふりしぼって出さないといけないという考えを根深く持っています。それが信仰だと思っています。いいえ、神の愛の呼びかけに私たちが応答すること、そのまま受け入れて、従うこと。これが信じることであり、救われるための条件です。

## 2B 付け足す福音 7

7 ほかの福音といっても、もう一つ別に福音があるわけではありません。あなたがたをかき乱す者たちがいて、キリストの福音を変えてしまおうとしているだけです。

ここの「ほかの福音」というところの「ほかの」というのは、「ヘテロス」というギリシヤ語が使われています。「ほかの」という言葉には、アロスというギリシヤ語とヘテロスというギリシヤ語がありますが、アロスは、同じ性質のもので異なるもの、という意味があるのに対して、ヘテロスは異質のものという意味があります。例えば、イエス様はご聖霊のことを、「もうひとりの助け主」を呼ばれましたが、聖霊がご自分と同じ性質を持っておられる、ということの意味しておられます。けれどもここでは、ヘテロスです。つまり、福音と言っても、実はその中身がまったく異なる、福音とは呼べない代物である、ということです。

つまり、「福音というのは、それだけで完全である。」ということです。それに何かを付け足したら、福音に何かが付けたということではないのです。付け足された時点で、それは変質します。そして福音の質そのものが完全に変わってしまい、福音ではなくなるのです。ここが、単に異なる教えと、キリストの福音を装いながら異なる教えの違いであり、後者のほうがずっと危険だということになります。

私は信仰をもって間もなくして、危うく異端の団体に引きこまれそうになりました。それは典型的な異端であり、現代のユダヤ主義です。キリスト者として成長したいという上昇志向がある人は、この落とし穴に入ります。あるいは、教会に対して不満を持っている、キリスト教全般に対して不満を持っている時に陥る罠です。私は、大学生で春休みになり、クリスチャンの活動をもっとしたいと熱心になっている時でした。キャンパスに、本当に熱心そうな男女、テレビ番組に出てもいいのえではないかと思われるような、今思えば、かえって怪しそうな目の輝きを持っていました。そして教会にいけば、熱心に聖書を教えてくれます。私が願っていたものでした、教会では教えてくれなかったからです。

そこで教えられたものの中で、「人間の責任と神の主権」というトピックがありました。救いは人の選択によるものか、それとも神の主権によるものか。これはキリスト教会の中でも、予定論という救いの教理の中で論争を生んでいるものであります。人はイエスを信じるという決断を強調するのが、アルミニアン主義と言ひ、神の選びを強調するのがカルビン主義と言ひます。こうした神学用語が飛び交って、何ら自分の問いに答えてくれない、命がないと私自身感じていました。ところが、彼らの言っていることは新鮮であると同時に、言いようもない違和感を抱きました。「人の責任は5%で、神の主権が95%だ。」どうでしょうか、5足す95で100ですね。そしていかにも、もっともです。しかし、その5%では済まなくなります。実際は人の責任が100%になるのです。つまり、救われるために自分が全ての責任を負っていく、がんじがらめの状態になり、いつまでも救われたという確信が与えられないまま、行ないに駆り立てられます。

ちなみに私がどのようにしてその団体から出たかと言ひますと、一つはキリストの十字架が書かれている聖書の箇所を読んでであり、もう一つは自分の通っていた教会で、ある年を召した姉妹の、単純で簡素な祈りによりました。そのつたないように見える祈りに、真実な御霊の流れがありました。これは明らかに、教理において偽りの教えがありますが、私が陥った過ち、すなわち、福音の留まるのではなく、「これこれのことをやってみたら、すばらくなる。」という誤った上昇志向です。福音の中に命があるのに、福音だけでは足りないと言って、さらに充実したものを求める志向を持っていると、これら偽の教えを受け入れる素地を自ら持ってしまいます。

「あなたがたをかき乱す者たち」とパウロは偽教師たちのことを言ひています。そうです、キリストの福音をかき乱し、キリストの教会をかき乱します。「そのような偽の教えを、取り組まなくてよいのではないか。教会は福音を信じているのだから。」と感じることがあります。私もできるならば、何の問題も感じないで、そのような心を騒がせかねないことはなければ、どんなに良いことかと思ひます。しかし、今はそのような時代には私たちがいません。恵みの時代であり、それは逆に言うと、毒麦もまだ刈り取られないで残るのを神が一時的にお許しになっている時代です。したがって、神の主権の中で、これらの偽りの教えが教会の中に入り込む信仰の戦いの中に、私たちは絶えず置かれていることとなります。むしろ、教会の中に平和と秩序を守るために、これらの偽りの教えと戦わないといけません。これらの教えの実はず、かき乱しです。

もう一つ、キリストの福音は一つしかないということも知るべきでしょう。エペソ4章には、「主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ(5節)」とあります。イエス・キリストのみなのだという福音に立てば、全てのキリスト者は一つになれる。これを、福音に何か違うものを付けたして、「これがなければクリスチャンではない」という二義的なものを持ち込んで、自分を他の教会から分離させているのであれば、その自分の信じている福音とやらが、実は逸脱した福音、福音と呼べるべきものではないことを自ずと明らかにしています。前回もお話したように、それぞれの特徴は福音から出てきた実であり、それ自体は良いものであるかもしれません。けれども、福音と同じようにしてその二義的なものを取り扱うならば、その人や団体はキリスト教会に亀裂を与えて、まことの福音

からも自分自身がずれています。

## **2A 神にのみ取り入れられる福音 8-10**

### **1B 使徒や天使も受ける断罪 8**

8 しかし、私たちであろうと、天の御使いであろうと、もし私たちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その者はのろわれるべきです。

パウロは、イエス・キリストの福音は神から来るものであり、人からではないのだということを、1-2章の中ではっきりと論じています。パウロたちが宣べ伝えた福音は、パウロから出たものだという考えを払拭するために、「私たちであろうと」という言葉を使っています。ユダヤ主義者らは、「パウロは自分で福音を作り替えてしまっているのだ。私たちはエルサレムから来た者たちで正統派だ。」という言い方をしていました。パウロなのか、それとも彼らなのかという選択を与えていました。しかし、それ自体が間違っています。パウロか、彼らなのかではなく、神から来たものなのかどうか、ということなのです。ここら辺が、多くのキリスト者がまだ信仰が幼いと陥る罠であります。パウロが語っていることが、聖書に書かれてあることであれば、それは神から来ているのです。パウロが語ろうが、誰が語ろうが、それは構わないことなのです。パウロ自身、その福音から異なることを語っているのであれば、彼自身は呪われるのです。

「天の御使いであろうと」という言葉も加えています。これは、旧約時代において、いや新約時代においても、天使が神の言葉を持ってくる働きを行なっていたからです。律法は御使いを通して与えられました。エゼキエル、ダニエルやゼカリヤ、預言者も御使いから言葉を与えられているのを見ます。ユダヤ主義者らは、御使いの働きも教えていたことなのでしょう。そしてそのような仲介を殊更に語ったのかもしれませんが。しかし、御使いであろうとも、そのような天の権威を持ったものであっても、異なることを宣べ伝えていたら呪われるのです。

ここの、「のろわれるべきです」という宣言は、申命記27章にある「呪われる」という言葉に通じるものでしょう。律法を全て行なわなければ呪われる、という文脈で書かれています。呪われるというのは、滅びることであり、神から見捨てられることであり、いつも神の祝福から引き離されている状態であります。地獄に投げ込まれるということもできます。したがって、偽教師に対しては神の怠りない裁きがあることを話しています。「マタイ23:13しかし、忌むべきものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、人々から天の御国をさえぎっているのです。自分もはらず、はいろいろとしている人々をもはらせないのです。」自分が地獄に行くようなことをしていることと、他の人を入らせないようにしていることはまた別であり、後者はもっと厳しい裁きが待っています。

### **2B 教師への裁き 9**

9 私たちが前に言ったように、今もう一度私は言います。もしだれかが、あなたがたの受けた福音に反することを、あなたがたに宣べ伝えているなら、その者はのろわれるべきです。

パウロは、呪われるという宣言、アナテマを繰り返しています。自分自身、そして御使い、それから彼らであります。パウロは注意深く、これは人によるものではなく、神に対する忠実さが問われていることを話しています。

そして、「あなたがたの受けた福音に反すること」と言っています。初めに受けた福音があります。その中にいかに留まるのかが、一人一人に問われています。いろいろな誘惑がありますね。あからさまな罪もあるでしょう。肉欲や情欲があるでしょう。またそれ自体は殊更に悪ではないにしても、その中立のものを神よりも大切にしたら、それは世の惑わしであり、思い煩いであり、そして、教会には物理的に来ている、心が福音に感動せず形だけになっているのであれば、それも危機的です。そのような形で、生きた神との関係、イエス・キリストにある関係を、教会がいかに純粋に保っているか試されていますし、また一人一人が試されています。その初めに聞いたこと、受けた福音に留まっているかどうか、初めの確信の中にあることことができるのかが大事です。

### 3B キリストの僕 10

10 いま私は人に取り入ろうとしているのでしょうか。いや。神に、でしょう。あるいはまた、人の歓心を買おうと努めているのでしょうか。もし私がいまなお人の歓心を買おうとするのなら、私はキリストのしもべとは言えません。

パウロは、福音というものがどういうものなのか、またなぜ他の別の福音と呼ばれるものに人々が引き寄せられるのかについて、ここではっきりと言っています。「神に取り入るのではなく、人に取り入れられようとしているから」ということです。パウロが注意深く、テサロニケ人たちにその福音宣教の姿勢を話しています。「1テサロニケ 2:2-5 ご承知のように、私たちはまずピリピで苦しみ会い、はずかしめを受けたのですが、私たちの神によって、激しい苦闘の中でも大胆に神の福音をあなたがたに語りました。私たちの勧めは、迷いや不純な心から出ているものではなく、だましごとでもありません。私たちは神に認められて福音をゆだねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせようとしてではなく、私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語るのです。ご存じのとおり、私たちは今まで、へつらいのことばを用いたり、むさぼりの口実を設けたりしたことはありません。神がそのことの証人です。」

キリストの福音というのは、必ず私たちの肉が嫌がります。したがって、それは受け入れたくないものであり、そして伝える者たちは迫害を受けます。なぜか？一つに、私たちの自尊心を傷つけます。あなたは救いが必要なのだと言っているのですから、自分が救いを必要とするような卑しい人間ではないと思っている人は、酷く傷つきます。キリストが全てのことをしてくださったという恵みは、言い換えれば自分にできることは何一つないのだということを教えます。もし、人が何かをできるのであれば、キリストは十字架に付けられる必要はなかったからです。

そしてキリストの福音は私たちの知恵を愚かなものにします。私たちは、いろいろ知恵を尽くし

て人が救われるにはどうすればよいかを考えてしまいます。しかし、それらをみな愚かなものとして、神が人となり、しかも僕の姿を取って、卑しめられ、殺されるという形で救いをもたらしたというものなのです。つまずきを与えること、満載です！

そしてキリストの福音は、人の知識を傷つけます。キリストの復活は、自分の経験や培ってきた教育や知識に反します。死んだ者が甦ることはないだろう、ということです。そして、甦りを信じることは必ず人を、人間ではなく神のほうに目を向けざるをえなくなります。神でなければ、復活という、罪と死の法則に反することはできないからです。

ですから、自分を捨てて、自分に対して死ななければ、キリストの福音を受け入れられません。そしてこれを伝えれば、必ず反対を受けて、迫害されます。それをいやがる、つまり自分の見かけや外見が大事である時に、偽りの教えが入り込んできます。「ガラテヤ 6:12 あなたがたに割礼を強制する人たちは、肉において外見を良くしたい人たちです。彼らはただ、キリストの十字架のために迫害を受けたくないだけなのです。」

私たちは、人から良く見られたいという強い欲求があります。自分をそれで守ろうとします。これは生存本能のようなものです。自分の考え方、生活スタイル、あらゆるものに「外見をよくしたい」という本能から出ていきます。そして、福音を信じたとしても、福音や信仰でさえも利用して自分を守ろうとしていきます。これが福音が福音でなくする、大きな要因であります。自分のそのままの姿が露わにされたとしても、それを隠さずにキリストのところに来る者が幸いです。そこに福音があります。パウロが言いました。「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。(6:14)」救いを十字架に求めるというのは、徹底的に自分の内に救いがないことを教えることであり、また世界にも救いがないことを教えることであります。そして世界が敵となる、キリストの十字架にあって世が自分に敵対しているということを認めることに他なりません。